



青森県立中里高等学校は、この地域にも高校をという住民の強い願いから、昭和51年に設立。当時、この地域は高校進学者が少ない状態で、中里高校の開校によって、進学率の向上に大きく寄与し、この地域にも高等教育の恩恵を与えた。輩出した卒業生は3,297人(平成22年度末)を数え、進学や就職など多方面で活躍している。

「創意、調和、貢献」を校訓に掲げる中里高校。中里地域のみならず、小泊地域や五所川原市市浦、つがる市車力などからも入学している、この地域にはなくてはならない高校だ。

この地域にとって、そして町にとって大切な学校「中里高校」の今の姿取材した。

開校を迎えた中里高校

143人の入学生を迎え、盛大に行われた中里高校の開校式・入学式と、創立落成記念式典の様子。新しい学校が開校するという、地域の念願が結実した瞬間だ。

当時の広報がとらえた写真からは、1期生のりりしい姿や、保護者・関係者の緊張した面持ちと、これから歴史を刻む新しい学校への希望が伝わってくる。



中里高校の学校活動は、どこの学校でも行われる文化祭や運動会などのほか、生徒は就職希望者が多いため、インターンシップや就職講習など、生徒の実情にあった教育活動が行われている。

特に就職講習は、今年から行われている新しい試みで、企業の就職試験に必要な基本的かつ実践的な知識を効果的に教えるものとして、同校でも就職率アップに期待を寄せている。

川口教頭が強調していたのは「行動しなければ、力はつかない」ということ。まず行動する、という姿勢が見える。

主な学校行事

- | | |
|-----------|----------|
| ・遠足 | ・全校ガイダンス |
| ・文化祭 | ・ワークショップ |
| ・運動会 | ・進路見学会 |
| ・スポレク大会 | ・交通安全教室 |
| ・中学校体験入学 | ・防災訓練 |
| ・インターンシップ | ・講演会 など |



【インターンシップ(8月30日～9月1日)】

生徒の職業観を養うインターンシップ。地域のさまざまな事業所に行き、働くことの大切さを学ぶ実習の場だ。



【文化祭(7月16日)】

年1回行われる文化祭は、男装・女装、コーラ早飲み、カラオケなど多彩な企画がある。生徒会が中心となって企画し、生徒たちが自分たちの手で作り上げる恒例イベントだ。



【サッカー部】

部活動



【音楽同好会】



【進路講話(5月25日)】

全校生徒に対し行っている進路講話。生徒の進路実現のため、仕事に対する実践的な知識を学ぶために行っている。この日は、ジョブカフェあおもりから指導を受けた。

学校活動

School
Activities

地域に根ざす活動

School
on Community



【ホタルまつりinなかどまり】

ホタルの里までのシャトルバス内で、資料片手にホタル観賞客への説明を行う生徒たち。彼女たちのがんばりに、乗客は大きな拍手を送っていた。

近年、中里高校の活動は学校内にとどまらず、生徒の出身地域での活動に注力している。

この活動の背景には、生徒の社会勉強といった側面のほか、「私たちは地域に支えられている」「地域あってこそこの高校」といったことがある。

同校が行う地域に根ざす活動は非常に多彩だ。地域の住民に学校を開く公開講座のほか、全校での清掃奉仕、町のイベントへの参加、夕涼み会という高齢者へのボランティア活動まで、多種多様な行事に自ら参加する。



【公開講座】

地域の人たちとの連携や、健康増進を目的に開かれている講座。地域の人たちが、先生や生徒と一緒にバドミントンを楽しみ、交流を深めている。

中でも、ホタルまつりのバスガイドや、高齢者生活福祉センターが行っている「夕涼み会」のお手伝い、まちづくり塾での体験や発表などは、周りの大人たちや社会から高い評価を受けている。

ここでも、川口教頭がいう「行動しなければ、力はつかない」という姿勢が現れていた。



【なかどまりまつり参加】

町の夏祭りにも参加。無形民俗文化財に指定されている「なにもささ流し踊り」の隊列に加わり、中央公民館からパルナスまでの道のりを練り歩いた。

中里高校の主な地域活動

- ・ホタルまつりのバスガイド
- ・全校奉仕活動
- ・夕涼み会ボランティア
- ・公開講座
- ・なかどまりまつり参加
- ・高校生まちづくり塾参加
など

参加している生徒たちの表情は、真剣で明るい。地域と関わることは、自分たちの将来にプラスになることを、十分理解しているようだ。学校という若者だけのコミュニティの中では味わえない、社会ならではの緊張感や面白さを体感している。

宮本校長は「地域に出す」ことが、生徒たちにいい影響を与えると話す。地域には多様な人間がいて、違った価値観同士の人間が仕事をし、交流を持ち、関わり合いながら生きている。それらを体験することが、彼らの将来のためになるというのだ。

実際に活動に参加した生徒も、地域活動への参加で、物の見方、自身の能力向上に手ごたえを感じているようだ。

この活動は、単に学業・生活といった枠にあてはまらない、生徒が歩む人生を念頭に置いた活動とを感じる。宮本校長が「生徒たちの希望進路実現が一番」という経営方針の現れであろう。



【高校生まちづくり塾】

若者の視点からまちづくりを考えようと、地域づくり団体「起きて夢見る会」が中心になって行っている塾。体験を通じて、生徒たちは町の資源を学んでいく。

【夕涼み会】

高齢者生活福祉センターが行う夏まつりのボランティア。出店や高齢者とのふれあいなどの活動を行っている。



【全校奉仕活動】

全校生徒が、一斉に町内に繰り出し、さまざまな奉仕を行う活動。今年は、運動公園の側溝清掃、国道のごみ拾い、静和園での介助手伝いをし、地域の人たちからも評価を受けている。

生徒会との座談会

活発な活動と元気が持ち味の生徒会活動



左から、青山穂奈美さん(3年・書記)、川口敏彦教頭、木村悠乃さん(3年・副会長)、間山夢子さん(2年・会計)、下山菜奈勢さん(3年・生徒会長)、工藤本気さん(2年・会計)、野上彩芽さん(2年・副会長)、山田優平さん(2年・書記)・秋田谷李さん(3年・監査局長)

中里高校の生徒会は、さまざまな活動に登場する動く集団だ。対面式、あいさつ運動、文化祭、スポレク大会、運動会など、実にたくさん行事に彼らは関わっている。そんな彼らは、生徒会に望んで入った生徒が多い。

—どうして中里高校を志望した？

木村 地元高校だから。近いから。ほかの高校だと、地元でのボランティア活動がしにくくなる。

中里高校は、ボランティア活動が活発だから。

—実際に入ってみてどうだった？

青山 人数が少ない分過ぎやすい。そのせいか、まとまりがある。

先生方も1人1人に尽くしてくるので、何でも話せる雰囲気。

—生徒会の主な役割は？

下山 行事があるとき、ほかの生徒たちをリードするのが大きな役割。その中でもあいさつ運動は、自分から進んであいさつし、学校を明るくしようと企画したもので、生徒会・校紀委員・PTA・先生

方が一緒になって、朝の登校時に玄関であいさつのがけを行った。やはり、人から声をかけられると自然に反応が返ってくることも多く、効果はあったと思う。

—生徒会活動のおもしろい点、苦労する点は？

間山 生徒会のみんなで話し合っているときは、すごく楽しい。ただ、会計担当なので、生徒総会での決算報告が私にはつらい。あがり症なので、震えてしまう。

野上 全部楽しい。いい先輩を持ったおかげで。

—生徒会に入って自分は成長したと思うかな？

工藤 積極的に、何でも前向きに行動することを学んだ。自分の生活・学業両面で役立っている。

下山 私は会長をやって、物事に対する考え方が変化した。生徒会活動はほかの生徒たちのために動き、雑用などもやらされて面倒なこと多いが、それを面倒と考えるか、楽しいと考えるかで仕事の効率が変わる。仕事の中に楽しさを見つけることが大事だと分かった。

—中里高校はさまざまな地域活動へ参加しているが？

秋田谷 外に出て行って、町の人と話ができるようにならないと仕事はできない。地域活動への参加は、コミュニケーション能力の向上に一役買っていると思う。

—高校での目標、今後の目標は？

野上 次期生徒会長！ 3年生みたいのに、3年生が築いた学校を引き継ぎ、もっといい学校にしたい。

山田 卒業までに、誰にでもバリバリ大きな声であいさつできるようにしたい。



山田 地元で、明るく楽しく、気軽になじめる学校。

間山 家みたいに気楽に過ごせる。第2の家。

秋田谷 暖かい場所であり、その中でもつらさを教えてもらい、自分の人間性を高めてくれる場所。

青山 自分を育ててくれた場所。以上！

木村 中学校と違って、学習への意識レベルを高くしてくれた。

—最後に会長から一言！

下山 中里高校は地元の小さい学校だけど、他の学校に負けなぐらいの誇りを持っています！

宮本芳夫校長インタビュー



—校長に赴任して感じたことは？

創立から36年たつてはいるが、校舎はきれいだし、施設も充実している。すばらしい学習環境だと感じた。生徒数は全盛期に比べて3分の1になっているので、もう少し生徒数が多ければ部活動などが活発にでき、学校がさらに活性化されるのでは、と思っている。

—生徒たちの印象はどうですか？

総じて問題などが少なく、生徒たちは、落ち着いて学校生活を送っている。ただ、生徒数が少ない、小規模校

ということがあるのかもしれないが、もうちょっと元気があってもいいのかなと思う。また、将来に対する目的意識をしっかりと持って

もらいたい。逆に小規模校のメリットを生かして、きめ細かく指導できるのが、本校の強みと感じている。

—保護者はどんなことを学校へ期待していますか？

部活動や勉強をがんばって、というのはもちろんあるが、一番の期待は、進路の実現だ。進学でも就職でも、希望進路の実現が一番。中里高校は、これに向けていろいろな指導をするのが最優先課題だ。

—地域に出て行く活動の意味・意義は？

主な目的は、生徒に自主性、社会性、協調性、コミュニケーション能力を養ってもらうため。学校の教員とは違う視点の人たちと接することで、それらが養われると思っている。この学校に赴任した直後から、「とに

かく外に出してほしい」と教職員には言ってきた。地域に出せば、子どもたちも成長するし、元気になる。

いろいろな地域行事に参加することで、地域全体で子どもたちを育てる視点というのが生まれてくるのではないか。

—それに対する地域の評判は？

地域の人たちの話に、中里高校の話題が上ってきて、関心が高まってきていると思う。「中高もがんばっているな」という感じでね。こういったことを、これからもアピール・情報発信しなければならぬと思う。

—地域の皆さんに一言

中里高校は、これからも地元の子どものための高校として、地域とともに成長していきたい。現在、中学生の皆さんには、地元にいる高校があるということ

Ending Sentence

これから、この先も。

中里高校の募集定員は、昨年度70人。全校で6クラスを維持しているが、それでも今年の入学者数は43人と定員に満たない。開校当初の入学者は143人を数えたが、少子化の影響で入学者数は減少している。

しかし宮本校長は、この高校の必要性をこのように話した。

「高校全入ともいわれる中、学力だけでなく社会を生きる力が重要な時代になってきた。だからこそ、中里高校は地域との結びつきを強め、地域活動に参加しながら、地元と一緒に成長してきた。私は、それぞれの地域に個性があるのだから、地元の生徒は地元で育てるのが一番だと思っている。中里高校は、この地域の子どもたちを育てる、大切な学校だ」

学校は、地域にとって、そこに住む人々にとっての道しるべ。これからも地元と一緒に歩いていく——。そんな思いを聞いた気がした。

